

論題 中世における聖書解釈

——ギリシア教父——

司会：聖書解釈の問題点——自己現成の場

東京大学 宮本久雄

提題：聖書解釈における正当性の問題——伝統
か〈時のしるし〉か

熊本大学 篠崎 榮

提題：ギリシア教父における聖書解釈の前提、
方法および意義

京都大学 水垣 渉

(於広島大学 1997. 11. 16)

司会 聖書解釈の問題点——自己現成の場

宮本久雄

問題は聖書をどう解釈するかである。その際、極端に図式化していえば、二通りに聖書解釈がなされうと思われる。一つは、聖書を啓示の書・聖典として読む解釈法である。それは古来よりコーランを啓示の書として読んだり、仏典を悟道の書とみる見方と共通であるといえよう。この解釈法にあっては、神仏の世界が人間の理解力を超えている以上、信を端緒として啓示を受容し解釈してゆくことが求められよう。そこでは、修徳行や宗教的伝承ないし共同体的解釈に支えられ、主我的立場から浄められて、恩寵により人間の側の理解のポテンシャルが高められてこそ、啓示にあらうことができる。だから、聖典テキストの解釈は、直接価値観や宗教的生活と結ばれてくる。もう一つは、聖書をシェークスピアの文学やツキジデスの歴史書やローマ法のような仕方を読む解釈法である。つまり、人文・社会科学では考古学の資料や作品として読む立場である。そこには勿論、学的還元主義の解釈傾向が支配的ともな

りうる。以上の二通りの解釈学的方法は、パラダイムが違う程に違うともいえる。さて、このような図式で考えたい点は、今回のシンポジウムでテーマとなった解釈(者)の現「場」ということである。解釈は勿論目の前に提出された多数の解釈例や選択肢を選んで何か客観的整合的な知の体系をつくることではなからう。それはわれわれ人間の場で、今・ここでこれしか語りえないという仕方、テキストの他者にまみえてゆくことであろう。それは同時に自己の成立であるような生命がけの行為でもある。だから解釈は最後まで「わたしの生」を括弧にくくり通すことはできない。このようにして宗教的聖典における他者は神のような絶・対者であり、他方で人間諸科学においては人間の他者が主となるであろう。その意味では、自然科学と異なって人間科学も「わたしの生」に価値的に関わってこざるをえない。いずれにしても、テキスト解釈は還元主義を脱して「わたしの生」を成立さす他者とのまみえに通底する。それは人生というテキストの呼びかけでもあろう。キリストが受難の杯を受けると語ったのは、ゲッセマネというテキストの現場であり、そうとしか語れぬ仕方、沈黙せる天父とまみえ、キリストに成ったのである。そのキリストに成るのが、今・ここでゲッセマネを生きるわたしの解釈学である。ただこのように極まる解釈が幻想と恣意に陥って解釈者の生を傷めたり、他者を自己に還元したりする事例には、テキストが大いなるものである程に歴史上事欠かないといえる(ここから正統と異端の問題も生じたわけである)。それゆえ、アレゴリー解釈であれ、現代の様式史的聖書解釈法であれ、言語論的アプローチであれ、多様なテキスト解釈にわが身をさらさなければなるまい。以上のような眺めに立ってみると、現代聖書学の視点(篠崎氏)で、この現場性がどこに現われているかを問うと、一つには歴史(カイロス)という場ではあるまいか。それは勿論、実証的歴史学の時間の再構成には入らない時である。他方、エックハルトなどが、ヨハネや創世記の「初めに」を自己の回心、存在の根源として今・ここで現場性にカイロ的に生き、その場を今日のわれわれに示し続けている点は、解釈法の根幹を開拓したといえる。さらにまた、解釈の場がマクロ・コスモス(神—人間—世界)という深層的文脈に支えられて成立しており、そうした宇宙論的ヴィジョンを披いたのがロゴス・キリスト論であるとの水垣氏の御指摘は、他者の共同体的まみえの地平を示されたものであった。

以上のように考えると、教父的聖書解釈は現代聖書学もやはり孕む自己(魂)の配慮のことを指摘し続けているのであり、パラダイムの相違を超えてその示しは今日の

われわれ一人ひとりにとって、問うべき大きな遺産になっているのである。

提 題 聖書解釈における正当性の問題

——伝統か〈時のしるし〉か——

篠 崎 榮

はじめに——問題の説明

聖書の物語も物語である以上、固有の論理と文脈をもつ、『創世記』の2章4節から3章までの「園のドラマ」（「楽園追放の物語」あるいは「アダム神話」とも言われるが「園のドラマ」と呼ぶことにする¹⁾）も例外ではなく、まずそれらのテキストは字義的に（＝著者が書いたとおりに）読まれなければならない、そのためにはテキストの歴史批判や背景の文化に関する知識など総じて聖書学の知見を参照するほうが誤解なく正確に読める。テキスト固有の文脈に沿って著者が書いたとおりに読むというこの作業を「テキストの読み」と呼んでおく。そこでは（少し問題を孕む言い方だが）〈客観性〉が求められる。（この客観性には、発表の最後で、それが最終的な拠り所ではないとして言及する。）

次にそのテキストが読み手によって解釈される。ここで私は「解釈」を、テキストに用いられていない言葉を鍵概念として、テキストから何らかの意義・教訓を引き出したり、テキストを自分の前もっての考えを確証するための典拠にしたりする作業の意味で使う。この作業を「テキスト（物語）の解釈」と呼んでおく。

以上の〈テキストの読み〉と〈テキストの解釈〉の区別を区別Aとする。

問題は、テキストの読みと、誰かの——例えばギリシア教父の——テキストの解釈が調和しない、しっくりつながらないという時に、私たちはその解釈をどう評価するかということである。つまり、もしテキストの読みの段階である種の客観性が定まるとすると、その読みとは調和しないような解釈をどう判断するかという問題である。

これが問題になるのは、一般に解釈のなかには〈不適切な読み込み〉と〈適切な解釈〉という区別がみられるからである。ここでは、その両者を区別する基準は、〈テキストの客観的な読み〉と調和するかどうかであると仮定しておく。